SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

保育における乳幼児を対象とした音楽表現活動プログラムの開発

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2019-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 眞佐江 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026540

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０４３８

研究課題名（和文）保育における乳幼児を対象とした音楽表現活動プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of music expression program for infants in Early Childhood Care and Education

研究代表者
石川　眞佐江（ISHIKAWA, Masae）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０４３６６９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　複数の保育施設において継続的な音楽活動を実施し、その検証を通じて音楽表現活動プログラムの構築を試みた。その結果、日常の保育や子どもの遊びとの連関を意識した音楽表現活動を継続的に実施することで乳幼児の音や音楽へのかかわりが変化することが明らかになった。保育における音楽表現活動においては以下の視点が必要となる。
　一つ目は音声コミュニケーションを基盤としてそこから様々な声の表現及び歌唱表現への発展を促す視点である。二つ目は身の回りの物と音を通じてかかわるということから、楽器と乳幼児のかかわりを考える視点である。三つ目は乳幼児が音に気付き音に耳を傾けることのできる環境を整えていくという視点である。

研究成果の概要（英文）：I conducted continuous musical activities at multiple nursery facilities and attempted to construct music expression program through its verification. As a result, it became evident that the involvement of infants 'sounds and music is changed by continuously performing musical expression activities conscious of linkage with daily childcare and children' s play. The following viewpoints are necessary for musical expression activity in childcare.
The first is to promote the development of various voice expression and singing expression from there based on voice communication. The second is to think about the relationship between instruments and infants from the fact that it involves things and sounds around them. Thirdly, it is a viewpoint that infants can notice the sound and prepare an environment where they can listen to the sound.

研究分野：幼児教育、音楽教育

キーワード：乳幼児　遊び　音楽活動　表現　コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

幼稚園教育要領及び保育所保育指針に領域〈表現〉が設けられて 20 年以上が経過した。領域〈表現〉では，子どもの自己表現を保証し，それを出発点として表現を育てていく考え方が示唆されている現在，保育所・幼稚園・認定こども園等を中心とした保育施設で行われている音楽活動は，歌唱活動や楽器を用いた活動から身の回りの物を使った音遊び，わらべうた遊び，サウンドスケープ的な活動から鼓笛隊，リトミックまでさまざまである。未分化な乳幼児の生活の中では，特定の技能を身に付けることを偏重するのではなく，素朴な乳幼児の表現の芽生えを見取り，総合的に育てるという姿勢が重要視される。

しかし，現場の保育者との議論や講演などの場では，「子どもの音楽的な育ちをどうとらえ，援助すればよいのかわからない」「元気な声で歌ってはいるけれど，これだけでよいのか」「乳幼児にふさわしい音楽活動とはどのようなものか」など，子どもの音楽表現のとらえ方や音楽表現活動の組み立て方についての悩みや疑問を受けることもまた多い。保育においては、「豊かな体験」や「情操」といった言葉で漠然とその重要性が語られているのみで、音楽的な活動を通して何を育てるのかその系統性や明確なビジョンが見えなかったり，そもそも子どもの音楽的な育ちにどうかかわっていったら良いかということに関して，議論が深められてこなかったりといった問題があるのではないか。

しかし「表現する力」と表現を介したコミュニケーションは「生きる力」の原動力となる。音楽による表現体系の形式や技能を学ぶ以前に，その原点にある乳幼児のプリミティブな「表現する力」を育てようとする視点が，こと保育に関しては重要である。また，乳幼児期において「音を介した表現」は，コミュニケーション力や想像力，身体感覚，そして感性の育成の根幹として極めて重要である。これらの視点をもち，さらに乳幼児期の発達特性をふまえた系統性ある音楽表現活動のプログラム開発は火急の課題と言える。

２．研究の目的

本研究は，乳幼児期の子ども（0 歳～6 歳）を対象とした音・音楽の表現及び聴取活動を中心としたワークショップの実践と検証を通じて，乳幼児の音楽的発達を含む心身の総合的な発達に資する音楽表現活動のプログラムの構築及び開発を行うことを目的とする。具体的には以下の三点を研究の中心とする。

（１）　保育施設における音楽表現活動の実態および問題点を明らかにする。
（２）　保育施設における音楽表現活動の提案・実施・検証を行う。
（３）　乳幼児期における音楽表現活動のプログラム構築及び普及を行う。

３．研究の方法

① これまでの国内外における乳幼児を対象とした音楽表現活動に関する教育史的，発達学的，実践史的な，様々な基盤的研究の整理を行い，それらの意義と課題を指摘して体系化する。
② 保育にかかわる現場における音楽表現活動の実践の調査，および保育者を対象とした質問紙調査などを通して，乳幼児期の音楽表現活動の実態把握と問題点の整理を行う。
③ 上記①②の成果およびこれまでの実践と研究成果をもとに，ワークショップ形式，体験型プログラム，コンサートなど，乳幼児期における音楽表現活動の実践的プログラムを発達段階や対象年齢ごとに構築し，開発する。
④ ③の成果を取り込み，実践の成果を検証する。実践を受けての子どもの反応や効果を分析し，また実践現場からの意見を反映させて乳幼児期の発達段階をふまえた保育に位置づく音楽表現活動のプログラムを再構築する。

４．研究成果

研究機関内に複数の保育施設において継続的な音楽表現活動を実施し、その結果の分析を通じて保育計画に位置づく音楽表現活動プログラムの構築を試みた。その結果、日常の保育や子どもの遊びとの連関を意識した音楽表現活動を継続的に実施することで、乳幼児の音や音楽へのかかわりが変化することが明らかになった。

乳幼児期における音楽的発達を踏まえ、保育における音楽表現活動は以下の３つの視点をもって構築することが重要ではないかと考える。

一つ目は声を使ったコミュニケーションを基盤とし、そこから声の表現、ひいては歌唱表現へとつなげていく視点である。声を使ったひととのやり取りは乳幼児期の非常に初期の段階からあらわれるが、そこにはさまざまな表現の要素がある。コミュニケーションの中で自分の声を使い分け、相手とやりとりしていくことが音声表現の基盤であり、歌唱もそれに支えられている。

二つ目は環境とかかわり、音を出すということからモノと子どものかかわりを考える視点である。生まれてすぐ、乳児は身の回りの環境とかかわりながらモノの属性や特性を身体を使って把握していく。そこには音を出すという行為も含まれており、音を通してモノとかかわり、モノと対峙する自分の身体を知っていくという視点が、いずれ楽器とかかわるようになる際にも重要となるであろう。

三つ目は音に気付く、音を聴くという視点である。聴覚は胎生期の早い段階から発達するが、乳幼児の音の聴き方は成人のそれとは

特性が違う。それを踏まえたうえで、乳幼児が音に気付き、音に耳を傾けることのできる音環境を整えていくという視点が重要である。

以上の点をふまえ、保育においては子どもの発達、遊び、保育内容と乖離しない形で日常生活の中にある音楽表現の基盤に働きかけるような活動を組織していくことが重要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 石川眞佐江「幼児の並行遊び場面における歌の機能―かかわりの生成に着目して―」『静岡大学教育学部研究報告　教科教育学篇』第 48 号 pp.59-74　2017 年　査読無

② 石川眞佐江、村上康子「２歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴―楽器へのアプローチの違いに着目して―」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol.15　pp.104-113、2017 年　査読無

〔学会発表〕（計８件）

① 石川眞佐江，小佐川心子，鹿倉由衣，長井覚子，村上康子，山中和佳子「保育における継続的なワークショップの試み―音楽にかかわる学びを中心に①―」日本保育学会第 70 回大会口頭発表　2017 年

② 村上康子、石川眞佐江，小佐川心子，鹿倉由衣，長井覚子，山中和佳子「保育における継続的なワークショップの試み―音楽にかかわる学びを中心に②―」日本保育学会第 70 回大会口頭発表　2017 年

③ 村上康子・石川眞佐江「保育における楽器を用いた活動の展開④」日本の保育学会第 68 回大会口頭発表　2015 年

④ 石川眞佐江・村上康子「2 歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴②」日本音楽教育学会第 46 回大会口頭発表 2015 年

⑤ 今川恭子・志民一成・小川容子・丸山慎・村上康子・石川眞佐江「それって音楽性？――人・音・環境の動的関係性を調律する musicality は資質を支える概念か――」日本音楽教育学会第 46 回大会共同企画 2015 年

⑥ Murakami, Y. & Ishikawa, M. “The Two-Year-Old Child’s Interaction with Musical Instruments” Pacific Early Childhood Education Research Association 15th Annual Conference. 2014 年

⑦ 石川眞佐江・村上康子「2 歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴」日本保育学会第 67 回大会口頭発表　2014 年

⑧ 村上康子・石川眞佐江「保育における楽器を用いた活動の展開③」日本保育学会第 67 回大会口頭発表　2014 年

〔図書〕（計２件）

① 『音楽を学ぶということ―これから音楽を教える・学ぶ人のために―』教育芸術社、2016 年、担当箇所：pp.24-25，31-36，44-46，98-107、全 152 頁
（監修：今川恭子，編者：志民一成，山原麻紀子，長井覚子，木村充子，藤井康之，分担執筆：石川眞佐江，国府華子，古山典子，斉木美紀子，鹿倉由衣，早川倫子，村上康子，山中和佳子）

② 『乳幼児の音楽表現―赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規出版、2016 年、担当箇所：pp.38-39,56-57,60-61,64-67,94-95,120-130、全 164 頁（監修：日本赤ちゃん学会，編者：小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子，分担執筆：石川眞佐江，奥村正子，志民一成，丸山慎，村上康子他 13 名）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
石川眞佐江（ISHIKAWA, Masae）
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：80436691

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)